

20年ぶりの準優勝!

新春の阿波路で健脚を競う
第62回徳島駅伝が1月4日から3日間の日程で開催され、16都市の代表チームが43区間257.3kmにわたり熱戦を繰り広げました。

西川誉監督率いる小松島チー
ムは、中原友雅主将をはじめ選手一丸となつてタスキをつなぎ、通算14時間5分41秒の成績で、第42回大会以来20年ぶりの準優勝を果たしました。



ゴールへ飛び込むアンカーの福島空也選手

沿道を大観衆で埋めつくし
た最終日のゴール前（徳島市幸町）では、団長の濱田市長や選手たちが迎える中、アンカーの福島空也選手が第2位を決定づけゴールすると、チームメイトが駆け寄り、福島空也選手を胴上げし、感動を分け合いました。また西川誉監督、中原友雅主将、大西亮選手も選手たちの手で何度も宙を舞い、喜びを爆発させていました。



ゴール付近で喜び合う選手たち



選手たちに胴上げされる西川誉監督

レース終了後、徳島市のホテルで第62回徳島駅伝閉会式が行われ、小松島市選手団に準優勝のトロフィーや銀メダルなどが贈られました。個人としては、大会最長区（14.4km）を区間賞で制した大西亮選者賞（MVP）を受賞されましたが、福島太郎選手が優秀競技者に選ばれました。

西川誉監督は、応援によつてかすれた声を振り絞り「全選手が奮起し準優勝できたことは非常に嬉しいです。走った選手の頑張りはもちろんですが、今回惜しくも応援に回った選手、長年お手伝いや応援していただいた役員、小松島市民、全ての皆様に感謝しています。まだ上はあるので優勝を目指して明日からまた頑張ります。」と喜びと感謝の気持ちを言葉にしていました。



2年連続のMVPを受賞した大西亮選手



準優勝のトロフィーなどを受け取る小松島市選手団（右から団長の濱田市長、西川誉監督、中原友雅主将）



準優勝を果たした小松島市選手団

《今月は、後期高齢者医療保険料7期分、国民健康保険税・介護保険料8期分の納付月です。》市税の納付は、確実・安心・便利な口座振替をご利用ください。

2016年(平成28年)2月5日
広報こまつしま